道へき・複連

発行者
北海道へき地・複式教育研究連盟
http://dohekifuku.zenhekiren.net/
委員長　柿崎秀顕
編集責任者　長谷川孝
印刷所　株式会社ビジネスサポート
岩内郡共和町南幌似39-１　TEL 0135-67-7350
題字 書家 濱谷 彩鶴（はまや さいかく）氏

「自然豊かな後志」から確かな足跡と「緑濃き空知」の新たなスタート

北海道へき地・複式教育研究連盟委員長　柿　崎　秀　顕

『自然豊かな後志から
夢・希望に挑戦する子らへ
豊かな心と学び続ける力を』
という大会スローガンのもと、第67回全道へき地複式教育研究大会後志大会を９月20日・21日に開催しました。

後志管内では前回行われた第54回大会から、13年ぶりの大会を、当管内でも加盟校が激減する中、400名を超える参加者を迎え、盛大に開催出来ましたことに感謝申し上げます。

また、北海道へき地・複式教育研究連盟は今年で設立70周年となり、記念すべきこの年に伝統と実績のある後志で大会を開催できたことに重ねて感謝申し上げます。

さて、本後志大会は、分散会での話し合いを昨年の成果を生かし、若い先生やベテランの先生、管理職までも同じテーブルにつき、話し合いをワークショップ形式で行うことにより、和やかな雰囲気のなでも立場や経験を越えて、活発な情報交換が行われ、研究の輪を一層広げる実り多き研究大会とすることができました。

また分科会においては、これまでにない取り組みとして、複式授業のスタンダードである「わたり、ずらしの手法」に対し、今までとは違った新たな視点から「発達段階に応じた学習過程の工夫」の取り組みが進められ、今後の研究の充実につなげたい思いを強く感じました。

特に、この学習過程の工夫の一つである「同時間接指導」の取り組みは大会終了後も数々の問い合わせがあったと聞いており、後志地区が積み重ねてきた実践は、今後へき地・複式・小規模校以外の学校においても生かすことができる研究だという思いと、これから迎える新たなステージへの道標の一つにもなったと確信しております。

また、空知プレ大会も「緑濃き空知の沃野から
次代を担う子らに　未来を切り拓く　たくましい力を！」の大会スローガンのもと５市町７会場で、へき地・複式の強みを生かし、学びあい、深めあい、高めあう教育実践を公開し、盛会のうちに終えることができました。

これから両大会の成果と課題を整理し、第９次長期５カ年研究推進計画のまとめと第10次長期５カ年研究推進計画のスタートへとつなげてまいりますので、ご理解とご協力をお願いいたします。

結びになりますが、両大会の開催にあたりまして、北海道教育委員会をはじめ多くの教育関係機関・団体にご指導ご支援いただきましたことに心より感謝申し上げ、道へき・複連情報163号発行にあたってのごあいさつといたします。

第67回全道へき地複式教育研究大会後志大会を終えて

北海道教育庁後志教育局
局　長　原　　光　宏

第67回全道へき地複式教育研究大会後志大会が、全道各地から多数の先生方をお迎えし、盛大に開催されましたことに、心からお祝いを申し上げます。

北海道へき地・複式教育研究連盟におかれましては、長年にわたり、小規模・複式の特性を生かした実践研究を積み重ねられ、本道におけるへき地・複式教育の振興・発展に寄与していただいておりますことに、深く敬意を表します。

さて、本年度から移行期間となった新学習指導要領では、子どもたちが学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるよう、各学校において「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善の取組を活性化していくことが求められています。

このような中、本研究大会が、「主体的・創造的に学び、豊かな心でたくましくふるさとを切り拓く子どもの育成」を研究主題に、管内の８会場で開催され、公開授業では、「児童が課題解決の見通しをもち、主体的に学習している姿」「学習リーダーが中心となり、意欲的に学び合っている姿」「児童が本時で学んだことを整理し、次時に向けて振り返りをしている姿」などが見られました。

また、研究協議をとおして、「児童の学習意欲を高める教材提示の工夫」「的確な児童の状況の把握による個に応じたきめ細かな支援」「学習リーダーを中心とした学び合いを実現させる環境の充実」など、へき地・複式教育の特性を生かした実践について、参加者と理解を深められたことと思います。これらの成果が、各学校及び各地域におけるへき地・複式教育の一層の充実に向けて活用されますことを御期待申し上げます。

結びに、北海道へき地・複式教育研究連盟並びに後志へき地・複式教育研究連盟の今後ますますの御発展と会員の皆様の更なる御活躍を祈念し、御挨拶といたします。

第67回全道へき地複式教育
研究大会後志大会
実行委員長　山本　康博
（蘭越町立昆布小学校長）

９月20・21日の２日間、全道各地から、へき地・複式教育の充実・発展に情熱を傾けておられる多くの皆様約420名の参加をいただき、第67回全道へき地複式教育研究大会後志大会を開催できましたことに、心より感謝とお礼を申し上げます。

本後志大会は、北海道へき地・複式教育研究連盟第９次長期５か年研究推進計画の最終年次となり、実践研究整理期として、豊かな心を育てる研究の系統的・発展的実践と記録の累計を図るとともに、確かな学力を育てる学習指導方法の究明に努め、「自然豊かな後志から　夢・希望に挑戦する子らへ　豊かな心と学び続ける力を！」を後志大会スローガンに、「後志らしい教育を“そだてる”“つなぐ”“ひろげる”場に」をめざし、実践的な研究を進めてきました。

１日目は、全体会における基調報告と、分散会において留萌、胆振、日高の各管内より、「学校・学級経営分野」「学習指導分野」の実践に基づいた貴重なご提言をいただきました。それに基づき、参加者の皆様方に熱心に協議いただき、率直なご意見と的確なご示唆を賜り、大きな成果となりました。

２日目は、後志管内８町村８分科会（潮路小、昆布小、近藤小、御保内小、鈴川小、西小樽山分校、神恵内小、都小）において、各分科会とも２本の公開授業と研究発表を行いました。

全道的に、他町村学校との共同研究、学校の極小規模化、変則学級編制等、小規模校なるがゆえの課題を抱えている状況があります。私たちは、全道の同じ悩みを持って頑張っている仲間たちに、後志の明るく生き生きと活動する子どもたちの姿を見ていただき、子どもたちに対する私たちの熱い思い・意図をお酌み取りいただけたのではないかと考えております。皆様から忌憚のないご助言やご示唆を賜り、感謝申し上げます。

終わりになりましたが、本研究大会の開催にあたり、ご尽力いただきました現地実行委員や分科会会場校の教職員の皆様、多岐にわたるご支援・ご指導を賜りました北海道教育委員会、北海道へき地・複式教育研究連盟、後志管内各町村教育委員会等、管内外の教育関係機関の皆様に感謝とお礼を申し上げ、挨拶といたします。

基　調　報　告

第67回全道へき地複式教育研究大会後志大会

研究部長　荒木　俊行

【後志の歩み】

昭和23年３月に後志単級複式教育連盟が発足し、同年11月全道単級複式教育研究連盟に加盟、昭和28年には第２回全道単級複式教育研究大会後志大会を開催、その後も昭和39年第13回、昭和49年第23回、昭和55年第29回（兼全国大会）、平成３年第40回、平成17年第54回大会と計６回開催している。この間「後志複式教育研究連盟」さらに「後志へき地・複式教育研究連盟」と改称しながら、後志管内のへき地･複式教育の充実・発展を担っている。

【現状とこれまでの研究】

現在、後志管内（小樽市を除く）の小学校40校のうち約４割が複式校であり、ここ十数年で統廃合や極小規模化が進み、平成17年の前回大会時のほぼ半数となっている。そのため、町内に複式校が１校のみという町村がほとんどとなり、町内で進めてきた小規模校同士の交流が児童及び教職員共に難しくなってきている。

本連盟では、このような状況を受け、これまで原則毎年行われてきた管内規模の大会を管内２ブロック体制による、研究大会と実践交流会の隔年開催へと変更した。また、後志教育研修センターと連携を図り、へき地・複式教育講座を毎年開催するなど、今後も絶えず研究発表並びに交流の場を設定しながら、継続的・累積的に研究を推進していく体制を構築している。

これまでの計６回の全道大会や管内の研究大会等の成果及び課題から、研究推進における基本的な押さえを①道へき地・複式教育研究連盟が作成した研究推進計画を踏まえる。②これまでの第１次長計～第８次長計までの研究の成果と課題を発展的に継承する。③後志のそれぞれの学校がおかれている地域・子どもの実態と三特性（へき地・小規模・複式形態）を最大限に生かす。④後志らしさがにじみでた研究を計画的に積み上げていくという願いや、時代が要請する今日的な課題の解決を目指すことの4点とし、「生きる力」を育成するという教育理念の実現のため、子ども一人一人の良さを生かし伸ばす教育、豊かな自然を活用した体験的な学習、学校・家庭・地域社会の密接な連携による教育活動を推進している。

【研究主題】

「主体的・創造的に学び、豊かな心でたくましくふるさとを切り拓く子どもの育成」

～へき地・複式教育の特性を生かし、児童生徒一人一人に未来に『生きる力』をはぐくむ学校・学級経営と学習指導の充実をめざして～

【大会スローガン】

「自然豊かな後志から　夢・希望に挑戦する子らへ　豊かな心と学び続ける力を！」

【後志大会の研究内容】

後志では全複式校が「学校・学級経営の深化・充実」と「学習指導の深化・充実」の両分野にそれぞれの課題を設定し、実践研究を推進している。「学校・学級経営」では、①「特色ある教育計画の創造」、②「開かれた学校・学級経営の創造」を研究内容とする学校がおよそ半数を占め、PDCAサイクルによる教育課程の見直しを進め、グランドデザインにより目指す子ども像、育成したい力を地域・保護者と共有するとともに、地域人材や関係機関との連携を深めながら、地域の教育資源の活用を積極的に行っている。また、「学習指導」では、⑥「主体性を育てる学習指導過程」、⑦「学ぶ意欲を育てる指導方法」を研究内容とする学校が7割を超え、学習過程の明確化、視覚化による主体的に学ぶ力の育成、学習を深める課題設定や展開の工夫など意欲の向上に向けた授業改善を進めている。

後志大会は、各学校が設定した研究主題による研究を大事にしながら、第９次長計の２分野８課題と擦り合わせ、関連をより明確にしながら研究を進めるとともに、プレ大会で明らかになった成果と課題の検証を図る。各会場校と協力校の連携及び管内的な情報交流を密にし、「オール後志」で第９次長期５か年研究推進計画のまとめとなるとともに、第10次長計に確実につなげることを目指すこととした。

【むすびに】

後志大会開催にあたり、多大なるご支援、ご助言をいただきました北海道教育委員会をはじめ、北海道教育庁後志教育局、北海道へき地･複式教育研究連盟、後志町村教育委員会協議会、各町村教育委員会、各教育関係団体等の皆様に心から感謝を申し上げます。

分　散　会

【分散会Ⅰ報告　学校・学級経営】
■研究課題　保護者・地域社会との協力・連携を密にした「開かれた学校」の推進
～ コミュニティ・スクールを中核に据えた連携の在り方 ～
提言者　留萌市立港北小学校　校長　秋葉良之

■提言概要
留萌市街地に位置している港北小学校では、急激な児童数の減少、近隣中学校の閉校、地域世代間のギャップと様々な課題を抱えている。こうした中、今年度より留萌市一斉にCSが導入された。そこで、本校ではこうした課題解決に向けて、児童や地域の現状を見つめなおし、整理をすることでCSを学校づくりの中核に位置づけた。学校運営協議会の開設にあたっては、身の丈に合った活動を進めていくことをコンセプトに、地域で発信力、行動力にたけている方を構成メンバーの中心に据えた。学校運営協議会がスタートすると、学校経営方針や学力・体力、学校の交通安全対策や道徳の教科化に関すること等が話題となり、予想を上回る活発な意見交換がなされ、取組の実現に向けて流れが加速してきた。CS導入の実践例としては、長期休業中の学習会、田植え・稲刈り体験、あいさつ運動、コミセン祭り等があげられる。今回の導入により、学校協議会委員の意識の高まりがみられたのが大きな成果であった。今後に向けて、①地域の声を聴き、様々な可能性を探る。②学校の取組のねらいとの整合性を図る。③地域のコミュニティとしての役を自覚することの3点が今後CSを持続していくうえで大切であること等が提言された。

■研究協議
「三特性を踏まえたCSの推進や異校種間連携の在り方」を討議の柱に、グループ協議を行った。『CS』については、地域との繋がりがより深くなることは、へき地複式校のよさであり、今後、学校としてCSの活動をどう整理し、まとめていくかが課題となる。そのためには、既存の組織や関係を生かして今行っている取組を持続的に行うことが大切であり、それが、教育目標の共有に繋がっていくように取り組んでいけるとより大きな成果となることが確認された。『校種間連携』については、小規模校にとっては有効であり、更にうまく進めるためには、管理職だけでなく、教職員にもしっかり役割をもたせ、どんどん引き込ませていくことの重要性等が確認された。助言者からは、今後、CSの活動が継続的・安定的に発展し、活性化していくためには、関係者間の思いや課題意識を共有し、共育の文化を地域に定着させることが重要であること、教職員の意識やチームとしての学校総合力を高め、学校の一層の活性化するための基盤となることを全教職員の共通認識としていく必要があるなどの助言をいただいた。

【分散会Ⅱ報告　学習指導①】
■研究課題　「確かな読み」を身に付け、自分の考えをもつ子供の育成
～ 個に応じた指導の充実を図る「読むこと」領域の指導を通して ～
提言者　豊浦町立礼文華小学校　教諭　大野　朋子

■提言概要
豊浦町立礼文華小学校では、確かな読みの力を付けることが書く力や他教科を学習する全ての基礎となることから、国語科の「読むこと」領域の指導を充実させてしっかりと基礎を作り、自分の考えを持てるように指導することが子どもたちの課題解決力の基礎を養うと考え、研究主題を設定した。更に、「確かな読み」「自分の考え」「個に応じた指導の充実」についてのおさえを確認し、発達段階に応じた到達目標を設定した。研究の仮説を、①「課題解決の手がかりとなる掲示物や板書、ノート指導を工夫し、家庭学習を通した基礎・基本の確実な定着を図ることによって、確かな読みができるようになるだろう」、②「本時のねらいを明確にし、ねらいに応じた課題設定を工夫するとともに、必要感をもって取り組める言語活動を位置づけることによって、自分の考えを持って読むことができるだろう」、③「児童の実態を的確に把握し、個に応じた指導の充実を図ることで、確かな読みを身に付け、自分の考えを持つことができるようになるだろう」とした。それぞれの仮説に対して「研究の視点」を設定し、研究を推進した。研究の成果として、「学びの地図」（単元を見通した学習計画）や「学びのらしんばん」（その時間の具体的な課題解決の方法を示すもの）は、「確かな読み」を深めていくための有効な手立てとなること、並行読書の習慣が身につきつつあること、課題設定とまとめ・振り返りを明確にすることが課題設定の工夫につながり、自分なりの考えを持たせることに有効であることなどがあげられた。課題として、適切な振り返りの設定の仕方や学び方の定着、家庭学習の取組みの充実などがあげられた。

■研究協議
「確かな読みが身につく課題設定と個に応じた指導」を討議の柱に、グループ協議を行った。課題の言葉を明確にし、焦点化すること、根拠を考えさせる時にはどこからそう考えたのかを説明できるように指導すること、音読の指導が大切であること、読む力を付けるには粘り強く指導する必要があること、ガイド学習などにより個に応じた指導が可能になること、個に応じた宿題を活用することなどの意見が交流された。
助言者からは、「学びの地図」が学習内容の見通しを、「学びのらしんばん」が学習方法の見通しを持つことに参考になる取組であること、学習のねらいと子どもたちの実態の差が課題であり、その差を埋めるために、目指したい姿を明確にし、どこまで育ってきたかを把握することが大事であること、言語活動に必要な五つの意識と言葉の力の育成や語彙力を付けること、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた振り返りの充実や「言葉による見方・考え方」を大切にすることなどの助言をいただいた。

【分散会Ⅲ報告　学習指導②】
■研究課題　他者と伝え合い、自己の生き方について考えを深める道徳科の充実
～ 言語活動を生かした「考え、議論する道徳」の指導を通して ～
提言者　新冠町立新冠小学校　教頭　佐藤　裕哉

■提言概要
東洋小学校は自校の目指す児童の姿、「児童が自らの考えを他者と伝え合う」「自分自身を見つめ、自己の生き方を考え、行動する」を推進するために、研究課題を「他者と伝え合い、自己の生き方について　考えを深める道徳科の充実」とし、言語活動を生かした「考え、議論する道徳」授業を目指し、授業改善を５つの視点、①言語活動の活用②資料提示の方法③発問づくり④板書の多様化・構造化⑤書く活動の工夫、に沿って推進してきた。研究の成果としては、話し合いを進行役の児童に任せることで、意見や質問が出やすくなった。板書の可視化により話し合いがより深まった。子どもの考えが滞った時の教師の課題に向かう臨機応変な対応ができるようになってきた。などがあげられた。また、課題としては、話し合いが滞った時の補助発問の工夫と発するタイミングの見極め。教材研究の深化とぶれない主発問づくりの重要性。「とらえる」場面と「みつめる」場面のバランスのある授業の確立。などがあげられた。

■研究協議
「他者の多様な考えに触れる道徳科の発問や振り返りの工夫」を討議の柱にグループ研究協議を行った。小規模校で多様な意見を持たせるためには、①他校と連携した、ICT合同授業の試み。②バーチャルクラスメイトを用いた、子どもと教師の対話を活性化。③補助発問の工夫や、予想される子どもの考えに対する回答を準備する重要性。発問づくりでは、①個人解決時に同時間接場面を設定した子どもに寄り添う発問づくり。②子どもの発言を蓄積して次の学年につなげる発問づくり。③内容項目に迫る、主発問づくり。④前学年の子どもの記録を次学年で活用した発問づくり。また、振り返りでは、①ワークシートやノートの活用を通し、振り返りの型の提示。②内容項目や題材を基に、授業の中で育った変容の評価。③身についているか確認できる場面を用いた、チャンス指導の実践。など多くの重要性が確認された。
助言者からは、文科省「人口減少社会のICT活用教育実証事業」成果報告会における、実践事例を紹介があり、遠隔授業交流を（本校と分校、北海道と沖縄という遠距離）双方向で行うことで、多様な考えに触れさせることができる。そのためには、学校間の教育課程のすり合わせが重要となる。極小規模校における多様な価値観の育成においても、子どもの考えを引き出すためには、一人で考える時間を確保する必要がある。例えば、ペープサートを活用した役割分担・演技等を行い、対話を図る方法がある。また、道徳的価値の理解においては、問題解決的なアプローチで、子どもに「あなたならどうなの？」と自ら気づくことのできる授業展開が必要になる。そのためにも、子どもに寄り添った教材研究で、子どもの思いを引き出す授業づくりの積み重ねが重要である。発達段階に応じた道徳の学年別指導を推進が重要である。などの助言をいただいた。

各分科会報告

〈第１分科会：寿都町立潮路小学校〉

１　研究主題

『自ら進んで学び、ともに高め合う子どもの育成』
～複式学級の特性を生かした算数科授業の構築～

２　研究仮説と成果

仮説１　**「『学びを充実させる学習指導』日常での学び方を意図的・計画的に指導することで、児童は見通しをもって学習に取り組み、主体的に学び、考えることができる。」**

仮説２　**「『間接指導のあり方』育てたい力やねらいを明確にした上で、交流の場面を設定することで、ともに学び合うことができる。」**

本校では、４年計画の最終年次ということで、「おしょろスタイルの確立」を柱として研究を進めてきた。大会研究協議では、児童の実態から一人一人の力の差をどのように見取り、評価していくかという視点を重点に協議された。特に、公開授業では、研究を重ねてきた成果が表れた授業を展開させることができた。また、子供たちが主体的に学習規律を意識し、授業の流れを自分たちでつくっていく姿を「おしょろスタイル」として確立させることができた。

交流については、ペア交流を通して自信をもって全体交流へ繋げることができた。全体交流では、交流の目的を明確にすることによって子供たちの話す内容も深めることができた。

深い学びをするためには、数学的な見方・考え方ができることが重要であり、整備してきた手がかりカードは子供たちの思考をまとめていくためのツールとして有用である。学年によって多くの手がかりから選択していけるように発展させていきたい。

３　今後の課題

今後は、へき地の弱みを強みにする視点から、少人数だからできることを念頭に、主体的で対話的で深い学びをより一層高めていけるよう研鑽を深めていきたいと考える。

〈第２分科会：蘭越町立昆布小学校〉

１　研究主題

『主体的に学ぶ子どもの育成』
～「食と自然と文化を学び人とつながる教育」を通して、
能動的な学びを実現する算数科の指導の充実～

２　研究内容と成果

研究内容１　**主体的な学びのための課題意識の形成**

単元冒頭のオリエンテーションで、学習計画・学習課題づくりに取り組んでいる。当初は、教科書の内容を整理するだけだったが、高学年になると、そこで何を学びどのような力がつくのかを意識するようになってきた。また、各時間の振り返りを行うことで、本時で自分が学んだことを確認し、次時への見通しを持つことができた。

研究内容２　**質の高い同時展開過程への系統的指導**

学習過程を明確にし、個の学びが集団の学びに生かされる発表の仕方、話し合いの仕方などを低学年から丁寧に指導している。教師が「教え」から「学び」に指導観を転換したことで、子どもたちの学習観にも変化が見られるようになった。同時展開過程における学びの質を高めるためにも、数学的な活動を通し、数学的な見方・考え方を育てることを重視してきた。指導の積み上げが、主体的で、深まりのある学習へと繋がってきている。また、どの子にも学習リーダーとして他者と協働し、問題を解決していく力を育てる必要性から、発達段階に応じたリーダーの育成を行ってきた。高学年では、集団思考の時間には、どのような順で発表をすれば話し合いがより活発になるかなども考えながら学習を進められるようになってきている。

３　今後の課題

本校では、北海道へき地・複式教育研究連盟の研究主題を受け、地域性を生かした教育課程を再構築した。その教育を教科横断的に進めることにより、思考力・判断力・表現力等の資質・能力を伸ばすことにつながることが明らかになった。今後は、同時間接・同時展開過程の学習スタイルを、「誰でもできる授業」として定型化し、確立していきたい。

〈第３分科会：ニセコ町立近藤小学校〉

１　研究主題

『自ら学び　伝え合い　考えを深める子どもの育成』
～一人一人が主体的に取り組み、
豊かに表現する学び合いを通して～

２　研究仮説と成果

仮 説１　**「一人一人が生き生きと取り組む～自力解決において、一人一人の学習状況に応じた指導、支援の工夫を行うことによって、主体的に課題を解決する力を高めることができる。」**

仮 説２　**「他者とのかかわりの中で豊かに表現する～問題提示において、考えや立場を明らかにする「しかけ」の工夫を行うことによって、必然的に学び合い、高め合うことのできる子の育成を図ることができる」**

研究内容

近藤スタンダード～「わかる」・「できる」・「楽しい」授業を目指して、Ⅰ自己肯定感を育む学級づくり　Ⅱ学習規律の徹底　Ⅲ授業の定型化(「見通し」と「ふり返り」を入れた四段階の学習過程)の取組　Ⅳ基礎的・基本的な知識・技能を育む指導・支援の工夫　Ⅴ個に応じた指導・支援の充実　Ⅵノート指導の充実　Ⅶ学習形態の工夫　Ⅷ学習リーダーの育成　Ⅸ主体的に学ぶ児童を育て活用力を高める授業づくりを目ざした。また、話し合い活動の充実を目指して「話し合いが生じ」、「深い学びをつくる」「しかけ」により表現力の向上に取り組んできた。

これらの実践をふまえ、児童が見通しをもって授業にのぞみ、誰でも学習リーダーとなって主体的に学習を進められることにより意欲的に学習に向かう姿勢が見られるようになった。

３　今後の課題

話し合い活動の更なる充実をのため、子どもたちが各自の意見の相違を確認してより深めていける交流場面の設定、思考を広げる別答の用意、話し合い活動の場面で活躍できる学習リーダーの育成が必要がある。

〈第４分科会：真狩村立御保内小学校〉

１　研究主題

『「表現力」を高める指導の在り方』
～相手や目的を意識し，自信をもって
「思い」や「考え」を伝える児童の育成～

２　研究内容と成果

研究内容１　**国語科学習ガイドについて**

学習ガイドによる自主的な学習が定着し、児童は安心感を持って授業に参加できるようになり、見通しをもって学習できる同時間接の時間確保につながった。児童が自主的に学習活動を進めることで、教師のわたり・ずらしが容易になり、同時間接・同時指導など、複式授業の幅が広がった。ロードマップに沿って指導案や学習ガイドを組み立てるという手立てが明確で有効に機能した。また、目標や本時の学習活動がわかるため、同時間接による見取り・評価や指導・支援ができる要因となった。

研究内容２　**表現力、言語意識について**

学習ガイドにより、順序や表現方法が確認でき、自信をもった表現につながった。言語意識や表現の必要感に結びつくような授業の組立により、単元のねらいが達成でき、文章構造図やブレインストーミングなどを行うことで、一つ一つの言葉をしっかり選びながら自信を持って表現することができた。また、これまで学習した表現技法やモデル文を意識させるなど、児童の表現の幅が広がる指導・支援が行えた。さらに、文章、表現技法、発表方法の観点で振り返りを行い、他の教育活動とも関連させて指導したり、視聴覚教材を活用したりすることでより表現の幅が広がった。

３　今後の課題

本校の学習ガイドは教師主導で作成しており、児童が「自主的」に学習に臨める手段ではあるが、「主体的」に臨めるものとはなっていない。発達段階や単元に応じ、児童の考えや疑問も取り入れた形でのガイド学習にするなど、より学校全体で取り組みやすくする手立てを確立していく必要がある。また、一人学年の発想の広がりや練りあいの手立てを講じる必要もある。

〈第５分科会：喜茂別町立鈴川小学校〉

１　研究主題

『基礎・基本を身に付け、
自ら進んで学習する子の育成』
～算数科における指導の工夫を通して～

２　研究仮説と成果

仮　説１「学習過程や学習規律を統一し、学習環境を整えることで、子どもは、安心して授業に臨み、基礎的基本的な学力を身に付けるだろう。」

・視点１　鈴小スタイルの確立
・視点２　学習規律の確立

仮　説２「発問や指示、板書を工夫し、わかる授業を行うことで、子どもは『できた、わかった』等の達成感を体得し、学習意欲を高めるだろう。」

・視点３　テンポよいリズムと明確な手立て
・視点４　達成感のある１単位時間づくり

本校では上記の視点から、子供の主体的・対話的で深い学びの実現に向け、授業実践を中核とした校内研修を計画的に実施し、仮説検証を進めている。

当日の公開授業・研究協議では、ガイド学習による学習展開の定着、学習展開に沿ったノート作りや発表の仕方の定着など、子供が安心して学べる鈴小スタイルの進捗状況を確認した。特に、タブレットを活用したガイド進行は、主体的な学びの手立てとして一定の評価をいただいた。

また、ＩＣＴの活用や板書を工夫した分かりやすい指示や提示が、子供の多様な思考を生み出し、また、自力解決時間の確保につながるといった、少人数複式校の課題解決に大変有効であることを、大会を通じて確認することができた。

３　今後の課題

深い学びの実現に向け、学習の連続性を意識した学習課題や学習展開の工夫、教科の見方・考え方を刺激する提示や発問の充実等を図る必要がある。また、達成感のある授業づくりの視点からは、児童の授業評価（振り返り）の効率的な実施と、効果的な活用を図っていきたい。

〈第６分科会：倶知安町立西小学校樺山分校〉

１　研究主題

『確かな学力を身につける授業のあり方』
～複式授業のよさを生かし、基礎基本を
大事にした算数科のあり方～

２　研究仮説と成果

研究仮説１「学習の流れやきまりを統一し、見通しを持って学習することで、基礎基本を身につけることができる。」

研究仮説２「個に応じた手立てを充実することで、わかる授業につなげることができる。」

仮説１については研究内容１として「１時間の授業のあり方」「学習規律の見直し」「交流場面の設定」「ノート作りの工夫」の４点、仮説２については研究内容２として「個人の手立て」について研究を進めてきた。今年度は、３年計画の３年次ということで、研究内容２について手立てを「単元に向かうまでの手立て」と「単元の中での手立て」に分けた。算数カルテを作り、個別の弱点領域を洗い出し、補充問題に取り組むことで既習事項を理解し、学習に少しでもスムーズに取り組めるようにしてきた。研究協議は、５つのグループに分かれ、仮説１と２の５つの研究内容について成果や課題をあげて、改善策を作った。仮説１では、１時間の展開を見据えた時間配分の仕方、交流が活発になるような、学年に応じたスキルの定着、教師の関わり方、低学年から系統的に図や表を活用したノート作りなどの改善策があげられた。仮説２では、掲示物を活用した前時の振り返り、子ども達の思考を広げるための教師の関わり、単元を通して解決意欲が持てる単元構成があげられた。

３　今後の課題

少人数のよさを生かし、個別の手立てを授業に反映していくこと、学習リーダーが中心となって意見を出し合い高め合えるようにする、図や表を活用したノート作りができるようにすることなど目指す子どもの姿を明確にし、低学年から系統的に積み上げていく必要がある。

〈第７分科会：神恵内村立神恵内小学校〉

１　研究主題

『一人ひとりが主体的に取り組み、
　関わりあいながら伸びていく子どもの育成』
～算数科における問題解決的な学習を通して～

２　研究仮説と成果

本校では３年次研究として「主体的に学ぶ子ども」「自分の考えを持つ子ども」「友達と関わり合いながら考えを深める子ども」の育成を目指し、それを実現するために「課題設定・自力解決・発信と交流」の３つの場面で研究仮説を設定し、研究を進めてきた。

当日は、中・高学年の２学級の授業を公開した。研究成果として、学習規律の徹底によるスムーズな学習展開と、学習リーダーの効果的な活用があげられた。どの学年でも１時間で課題把握から習熟まで行うことを意識した同時間接授業の学習形態が、子どもたちに身についているため、学年が変わっても戸惑うことなく、自分たちで積極的に学習を進めることができた。また、昨年度から重視してきた自力解決の支援として、個に合わせた教具や既習内容の振り返りができるような掲示物を工夫することについての有効性を再確認することができた。発信・交流の場面では学習リーダーの育成を続けてきたことにより、子ども達がスムーズに自分の意見を発信することができていた。「友達との類似点や相違点を見つける」「一番便利な方法を見つける」など、交流の視点を与えることで子どもたちが主体的に考え、活発に話し合うことができることがわかった。

３　今後の課題

交流の場面では一定の成果があげられた一方で、発表された考えをもとに、より深く学び合うことができるような対話力の育成や、教師のゆさぶり・言葉がけが必要であり、今後の課題となることが確認された。

また、学年の段階や学年の人数に合わせた、よりよい学習の進め方や交流の在り方についても検討が必要である。

＜第８分科会：赤井川村立都小学校＞

１　研究主題

『人との関わりを大切に、
　　生き生きと学び合う子の育成』
～コミュニケーション力を高める指導の工夫
　　算数科を通して～

２　研究仮説と成果

仮 説１　「一人一人が見通しを持って学習に臨み、自ら課題を見つけ追究するすることにより、生き生きと学ぶ子どもが育つ。」

仮 説２　「自らの考えや思いを交流し伝え合う楽しさを知ることにより、子ども同士の関わりを深めコミュニケーション力を高めることができる。」

仮 説３　「一人一人が学習を振り返る取り組みを継続することにより、学ぶ喜びを実感し自らを高めたり相手を認めたりすることができる。」

本校では、ともに認め合いながら協力し（コミュニケーション力の伸長）、心を込めて豊かに表現し（評価活動の継続）、自主的・主体的に学ぶ（見通しを持って生き生きと学ぶ）子どもの育成のため、上記の３つの仮説を立てた。そして６年間を通じて、系統的・組織的「学び方のノウハウと喜び」を獲得することを目指して授業づくりを進めてきた。

子どもが単位時間の学習過程を把握し、見通しを持ちながら学習を進めている。解法のためのツール選択やＩＣＴ機器等を活用した活動を子どもたち自身で進められる。など、自主性・主体性に繋がってきたことが大きな成果である。

３　今後の課題

今年度が本研究のまとめの年次である。必要感のある課題設定の工夫や「交流を支えるスキル系統表」の小中９年間での有効な活用などについて推進していく。

開会式

「太陽となろう」斉唱

基調報告（荒木研究部長）

分散会Ⅰ（学校・学級経営）

分散会Ⅱ（学習指導①）

分散会Ⅲ（学習指導②）

分科会（授業公開）

分科会（研究協議）

次期開催地から　第68回全道へき地複式教育研究大会空知大会

北海道の教育の充実と発展を空知から。皆様のご参加をお待ちしております。

第68回全道へき地複式教育研究大会空知大会　実行委員長　八　柳　　圭

「自然豊かな後志から　夢・希望に挑戦する子らへ　豊かな心と学び続ける力を！」のスローガンのもと、後志大会が全道各地から多くのへき地複式教育に携わる仲間と成果を共有し、成功裏に終えられたことに、心より敬意を表します。大きな災害の後にも関わらず、大会実行委員の皆様、そして各学校教職員の皆様の周到なご準備と丁寧な運営に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

さて、第68回全道へき地複式教育研究大会空知大会は、平成31年度９月19日（木）に岩見沢市において全体会、20日（金）に空知管内５市町７会場において分科会を開催いたします。

第９次長期５カ年研究推進計画最終年度としての「実践検証整理」を踏まえながらも、10次長期推進計画に基づく研究を推進し、10次長期推進計画の初年度として、自校の研究課題や学校運営の状況をもう一度見つめ直し、研究の成果を全道へ発信していきたいと考えています。大会スローガンを『緑濃き空知の沃野から　次世代を担う子らに　未来を切り拓く　たくましい力を』と設定し、空知管内のへき地・複式校の協働・共育・共生の下、英知を結集し、共同化による組織的・計画的な実践研究を進める大会として、取り組みを進めているところであります。

北海道の母なる川「石狩川」の恵みと緑の田園風景、自然豊かな森林と湖沼の広がる空知に、全道各地より多くのへき地・複式教育に携わる皆様をお迎えし、共に学び・語り合い、複式教育の充実と発展に寄与する大会となるよう努めてまいります。実行委員会一同、皆様のご参加を心からお待ちしております。

■空知大会スローガン

『緑濃き空知の沃野から　次世代を担う子らに
未来を切り拓く　たくましい力を』

■開催期日

平成31年９月19日（木）全体会・分散会　20日（金）分科会

分科会	会　場　校	研　究　主　題　～副主題～	分野・課題　教科等
1	深川市立 北新小学校	「主体的に学び、互いに成長しようとする子の育成」	学校・学級経営　1 学習指導　6 国語・算数
2	深川市立 納内小学校	協働的な関係を築き、集団としての学習力を高めるために ～算数科におけるコミュニケーション能力を生かした授業の構築～	学校・学級経営　1 学習指導　6 算　数
3	美唄市立 峰延小学校	自己学習力を身につけ、学び続ける子どもの育成 ～算数科における効果的な間接指導のあり方～	学校・学級経営　2 学習指導　6 算　数
4	岩見沢市立 メープル小学校	自分の考えを表現し、深め合う子どもの育成 ～伝え合い活動の工夫を通して～	学校・学級経営　3 学習指導　6・7 国語・外国語
5	栗山町立 継立小学校	「主体的に話し合い、互いに高め合う子どもの育成」 ～進んで発表し合い、考えを深めるための算数科の指導の工夫～	学校・学級経営　3 学習指導　6 算　数
6	長沼町立 長沼舞鶴小学校	共に学び、互いに高めあえる子どもの育成 ～根拠を明確にし、自らの考えを表現できる算数科の指導を通して～	学校・学級経営　1 学習指導　6 算　数
7	長沼町立 南長沼小学校	「学び合い考えを深める子どもの育成」 ～主体的で深い学びを実現する算数科の授業づくり～	学校・学級経営　1 学習指導　6 算　数